

中世の神祇観

——舍利信仰と神祇——

鈴木善鳳

緒言

中世の思想はさまざまな側面からとらえることができる。鎌倉新仏教の形成と南都旧仏教との対立、本地垂迹説の形成と展開、寺院の権威化に対応する神道側の独自の理論形成等。中世史の研究にはこうした諸状況を体系的に把握する視点が求められる。本稿では神祇と仏教との交渉を舍利信仰をキーワードに考察したい⁽¹⁾。

神仏習合の形成過程と舍利信仰

神仏交渉の過程についてはさまざまな考察がされるが、a、護法善神の段階、b、「神身離脱」の段階、c、本地垂迹の段階の三つの過程をへて定着をとげたとするのが研究者間のほぼ一致した見解である⁽²⁾。それぞれの段階は複合的で時代区分は必ずしも明確ではないが、本地仏と垂迹神が定着し、一般に流布していくのは鎌倉く南北朝ごろとされる（清原貞雄

「神仏習合の発展」平岡定海編『権現思想』）。

本地垂迹説の根拠となるのは「摩訶止観」または「和光同塵」の文⁽³⁾、および『悲華經』の改変文「我滅度（または涅槃）後、於惡世（または生死）中、現大明神、広度衆生」⁽⁴⁾とされる。とくに後者の文は滅後の仏舎利の神変教化を示し、それが具体的には神祇への変化という形をとるものと解されている。

そもそもわが国においては蘇我馬子が司馬達等の献じた舍利で法会をしたという記述が『日本書紀』にみられ、その後、数回の伝来をへている。十世紀半ばより神社の仏舎利奉納が行われるようになってくる⁽⁵⁾。一方、鎌倉期の浄土教の隆盛の対極におこった釈迦正法の世への憧憬が舍利への関心を高めさせ、舍利信仰を儀式化した『舍利講式』『舍利供養式』等の書物が覚鑑、解脱、明恵、叡尊らにより執筆される。

神仏一体のキーワードとしての舍利

神仏交渉の歴史の特徴としては、仏教者が積極的にかかわ

り、その理論形成を試みていることがあげられる。神祇信仰と舍利とのかかわりに関しても仏教者がその理論形成につとめているのがわかる。『溪嵐拾葉集』（光宗著。一二一八年の序あり）には前述の『悲華經』の文が紹介され、『現大明神広度衆生』と云々。大師釈して云く。『如来唱於三密とは滅後の衆生を利益す。唱於舍利とはこれ如来の身密、唱於神明とはこれ如来の意密なり』と、舍利と神明とが身業と意業の關係で受け止められている。同様の思想は『東大寺八幡驗記』にもみられる。明恵の春日神の靈驗を伝えた『明恵上人神現伝記』（一二三二〜一二三三成立）には仏舍利と一体化する春日神の記述がみられ、前述『溪嵐拾葉集』には日吉明神が解脱に舍利を讃じた託宣をする記述がみえる。このように十四世紀の初頭にはすでに舍利と神祇との一体感が仏教者間に意識され、ことに三業説の援用により両者の同質性が理論化されていたことが知られる。

『悲華經』にみられる仏舎利の神変

前述のように仏舎利と神祇の關係づけに『悲華經』の「現大明神」の偈が思想的根拠としてあげられている。『悲華經』は周知のように西方浄土教のアンチテーゼとして、南都仏教者たちの釈尊讃仰の根拠とされた經典である。「現大明神」の偈は同經にはみえず、經典の權威に仮託して作られたものと

思われる。同經の「諸菩薩本授記品」にはいくつかの仏舎利の神変が紹介されており、涅槃の後の釈尊の遺徳を讃える形になっている。

- もしわれ涅槃して正法賢劫ともに滅尽しおわらん。わが齒骨ならびに舍利、ことごとくまじに變化して仏の形像とならん（卷六・大正蔵三・二〇三・a）
- 法炬滅し、法幢倒れ、正法滅しおわる。わが舍利ついで地に没し金輪際に至る（中略）わが舍利、變じて意相瑠璃宝珠となる。その明焰盛んにして金輪際より世間に出て、上阿迦尼吒天に至る。種々華・曼陀羅華・摩訶曼陀羅華……を雨らす（中略）また種々の微妙音声を出す。仏声・法声・比丘僧声・三帰依声……（中略）世尊、かくの如き諸華、虚空中においてまたまきに種々の珍宝を化作すべし。金・銀・摩尼・真珠……雨のごとくして下る。一切娑婆世界に遍満す。その時に人民、その心和悦し、もろもろの鬭争・飢餓・他方怨賊・惡口・諸毒なく、一切消滅して皆寂靜なるを得（卷七・同二一・b・二二・b）

以上の經文から、仏舎利が仏等に身を変えて、無量の世界に至って教化を施すこと、それらの教化・利益はことに正法衰滅時になされることがわかる。たとえば宝珠（意相瑠璃宝珠）となり、雨華し、音声を出し、宝物を化作する。「舎利の仏事」とはこのように身を変える（変化）という形でなされるのである。

これらの經文が「釈迦如来の五百大願」としてまとめられ

たのが、『釈迦如来五百大願經』である。同經に関する書誌学的研究はすでに先学の成果があり、ここでは舍利信仰への言及についてふれることとする。

五百大願の中で舍利の神変教化に関するものは第三五五・四五〇願である（これらは先述の「諸菩薩本授記品」の文を増広したものである）。その第四四九願は次のごとくである。

・第四百四十九願。われ未来に正覚を成じおわりて涅槃に入りて後、舍利所化の衆生の世に住せん。十方世界において正覚を成じおわりて、おのおの衆会の中においてまきにわが名字を称してこの言をなさく。過去久遠に仏有り。釈迦尊と名づく。かの仏涅槃に入りたまいて後、刀兵・疾病・飢饉劫起る。われらその時、その劫中においてもろもろの苦悩を受けん。この仏舍利、われらがための故に、種々神足・師子遊戲をなさん。この故にわれら、かの仏舎利の教化力に因るが故に、即ち菩提心を発じ、善根を修集して、今日正覚を成ずることを得て、妙法論を転じて衆生を教化す。かの仏舎利はこれ我が大師、その本縁を説きてわが名字を称して功德を讃歎し衆生を利益せん。もししからずば正覚を成ぜじ（第四四九・舍利大師願）

ここでは仏滅後の舎利の利益が強調され、これ以前の舎利に関する願文が包括的に結ばれている。舍利が変化して「種々神足・師子遊戲」とするという舍利変化の記述は『悲華經』本文にはみえず、内容的にかなり増広されている（ちなみに四四九願は『白宝抄』駄度勘文・舍利即菩提心事に『悲華經』第四

百十九願に云く」として引文、大正藏・図像一〇・二二一・a⁽¹⁾。

「現大明神」の偈の形成

『大願經』の中には神祇への変化を直接ほのめかす願文は確認されぬが、「現大明神」の偈はこのような増広の延長線上に生み出されていたことが推測される。それを示す決定的根拠は見出せぬが、次にあげるいくつかの事例はその判断を助けるものであると思われる。

良忠（浄土宗第三祖）の『浄土宗要集』（二二八二成立か）に『悲華經』に云く。わが未来世・濁惡世の中、阿弥陀經を宣説せん。もししからずんば正覚をとらじ云々」とある（浄全一・五一六頁）。これと同意趣の文が、聖問の『釈浄土二藏義』（二三八六成立同一二・二五〇頁）、聖聰の『大經直談要註記』（一四三三以降成立同一三・一〇一頁）にもみえる（野村卓美『悲華經』と中世文学、『国語と国文学』八三六号、後者は「五百大願第一に云く」となる）。良忠らが意図的に改変したか、あるいは同願文のあるテキストが存在したか二通りが考えうるが、たとえば了慧の『選択集大綱抄』（一二九六成立）に『維摩經』仏国品に酷似した文が「釈迦の本願」として紹介されており（同八・三一頁）、『撰集抄』（一三世紀後半か）には、恐らく『法華經』の誤写と思われる観音の縁日が『悲華經』の文として紹介されている（西尾光一校注 岩波文庫本 二二四頁）。『大願

『經』の願文はかなり流動的に改変されていたことが推測される。

また近年名古屋の七寺から『釈迦牟尼如来五百本願功德經』（巻下）が発見された。末木文美士氏によると『悲華經』巻八の諸菩薩本授記品の部分にその後の經の概要を付したもので、「高山寺本とは相違している」という（「明恵の釈迦信仰」『岩波講座 日本文学と仏教』三・二四四頁）。これによつてみると五百大願の名を付したテキストは何種類が存在したことが推測される。

『神道集』には上記『悲華經』の文の他に、『般若經』の「為未來世 濁惡之時 即現大祠 神形利生」、「大日教主の云く」として「大日如来、龜同類となりて、權に冥神と成るは、心嬰兒に同ず」との文がある。また貞応三年『延暦寺大衆解』には『大集經』の語として「仏、一代の聖教を十方靈神に付属したまう」との文が引かれている。このような改変は當時の神国思想と軌を一にするものであらう。

神祇＝舍利信仰の根底にあるもの——結びに変えて——

『五百大願經』の成立は遅くとも正治元（一一九二）年と考えられ、時代的に法然の浄土宗が一般に流布した時期と重なる。それは同時にアンチテーゼとしての釈迦信仰への契機であり、本地垂迹思想の成熟の時期でもあった。今回は、こ

く大まかな時代の流れを追つて問題の所在を明らかにした。なおこの問題の考察の上で、社会的背景の思想形成に及ぼす影響への視点は不可欠であらう。具体的には律令制的土地制度の有名無実化と「寄進地系莊園」の増加、寺院の莊園領主化と貴族仏教化、それに伴う既存の神社やそれに付随する權利を取り込む「思想」の必然性等が考えられなければならないであらう。詳細な考察は後日に譲りたい。

1 本稿でいう「中世」は広く莊園制が進展し出す十世紀後半から、本地垂迹思想が定着する南北朝期ごろまでをさすこととする。また漢文は読み下しにした。

2 村岡典嗣『神道史』（日本思想史研究Ⅰ）、清原貞雄「神仏習合の発展」（平岡定海『権現思想』所収）、中井真孝「神仏習合」（講座・日本の古代信仰・第一巻）

3 第六巻下・正修章・觀陰入境。大正蔵四六・八〇・a

4 この文は『神道集』巻一・三、「豐葦原神風和氣」巻下、「日吉山王利生記」巻一、『麗氣集』巻八等に引かれる。ところが同一の文が『悲華經』にみえず、恐らく『末法經』『大悲分陀利經』をもとにした改変と思われる（三崎良周『台密の研究』五七六～五七七頁）。

5 仏舍利奉納は十世紀以降盛んになる。『日本紀略』によれば、九四八年九月、九六二年五月、九七一年一〇月、九八七年九月、一〇一七年一〇月の奉納が、『扶桑略記』『元亨釈書』によればさらに、一〇三八年六月、一〇四九年二月、一〇七〇年一月の奉納がみえる。一二九二年一〇月以降は「一代一度」となる。

6 卷四、大正蔵七六・五一・b

7 続群書類従・第三輯上・二四一頁

8 明恵上人資料一・二四七頁

9 「如来の舍利、光明を放ちて遍く十方刹土を照す。刹土の一切、機に随応して利益微妙なること思議しがたし」(大正蔵七六・五四三・c、明恵も春日神からほぼ同意趣の偈をうけている。上述『神現伝記』)

10 成田貞寛「高山寺所蔵『釈迦如来五百大願経』の研究」『佛教大学大学院研究紀要』第七号・一九七九年

『悲華経』の第六、八巻の願文を敷衍し、ナンバリングしたものの。おそらく平安期に西方浄土教に対抗して編纂されたものと思われ、中世諸文献所引の『悲華経』は実際は本書であることが多い。

11 なお、第二八、四七願では、諸身(仙人、摩醯首羅天、八臂天、日天子、月天子、梵天、帝釈天等)に変化して菩薩行を行うとの願がみられる。

12 前掲、成田論文

13 この種の視点から考察を加えたものに、永島福太郎「春日社興福寺の一体化」『日本歴史』一二五号・一九五八年がある。

〈キーワード〉仏舍利、『悲華経』、『五百大願経』、改変文

(武蔵野女子大学仏教文化研究所研究員)

新刊紹介

中村了昭 著

マハーバーラタの哲学 下

A5判・五七八頁・定価一二、〇〇〇円
平楽寺書店・二〇〇〇年一月